

ZOOM▶

写真劇場

オータム・リーブス

エッセー 須磨久善 すまひさよし 写真 大出一博 おおいでかずひろ

「紅葉狩り」とは、いつごろから言われはじめたのだろうか。リンゴ狩り、ブドウ狩り、マツタケ狩りなどは実際そのものを獲りに行くのだから納得だが、紅葉は見に行くだけなのに。いや、はらりと舞い落ちた赤い葉を拾い集めて持って帰るから狩りなのかもしれない。

これまでに、どれだけ多くの場所で紅葉を愛でたことか。満開の春の桜を眺めると自然に笑みがこぼれるように、深紅に染まった紅葉の中に身を置くと思いが出てしまう。

見上げれば眩しい深紅の紅葉の群の間から木漏れ日が降り注ぐ。うつむけば胸に浸み入る色とりどりの枯れ葉の絨毯。そして眼前には黄金色に燃える秋の木々のトンネルが待ち受ける。一步足を踏み出した時、足元でカサリと音が聞こえると、あの「オータム・リーブス」が心の中で流れ出す。

名曲「紅葉」はジャック・ブレヴェールによる原曲のフランス語の詩、「ムーン・リバー」などの作詞を手掛けたジョニー・マーサーによる英語詩、そしてさまざまな日本語訳詩があるが、私の好みはエリック・クラプトンだ。訥々と歌う低音に絡みつく彼のむせび泣くギターが過ぎ去った恋への追憶を偲ばせる。

英語詩の中で好きな一節は、「I see your lips, the summer kisses, the sun-burned hand, I used to hold」。去って行った恋人と過ごした夏の日々が、まざまざと目に浮かぶ一節だと思う。

秋の日差しの中で紅葉の着物を纏ったこの美女の眼差しの彼方に、どんな物語があるのだろうか。

